

明治村教育資料館（旧登米高等尋常小学校校舎）

この U 字型の建物は 1888 年に建てられ、当時の登米高等尋常小学校が入っていました。

学校としての使用は 1973 年に終了しましたが、明治村教育資料館では、いくつかの教室を再現し、社会の変化とともに学校生活がどのように変わったかを示しています。学校給食の歴史から、職業技術を教えるために使われた様々な縫製機（ミシン）のモデルに至るまで展示されています。壁に掲示された教科書のページや宿題は、過去の時代の小学生たちが第二次世界大戦やその他の歴史的出来事をどのように体験したかを垣間見ることができます。

この建物は、越後（現在の新潟県）の建築家、山添喜三郎（1843-1923）の監督の下に建設されました。彼は師匠である大工の松尾伊兵衛と共に、1873 年のウィーン万国博覧会の日本館を建設するためにヨーロッパに渡りました。その後、ヨーロッパに残り、西洋建築を学び、日本において西洋風の建物を建てるようになりました。

厳格な監督者で完璧主義者であった山添は、この建物の屋根瓦が使用に適するかどうかを判断するため、すべての瓦を計量し、水に浸して再度計量し、どれだけ水分を吸収するかを測定するように命じました。その妥協しない態度は問題を引き起こしました。労働者たちが不満を募らせ、梯子を取り外して山添を屋根に取り残すという事例や川に人力車ごと放り込まれるという事例があります。

それでもかかわらず、建物は完成し、現在では西洋と日本のデザイン要素を融合させた明治

時代（1868–1912）の建築スタイルの良い例として評価されています。現在、この建物は宮城県の明治村のシンボルとなっており、1981年には国の重要文化財に指定されました。資料館とその敷地内では、写真撮影が奨励されています。